



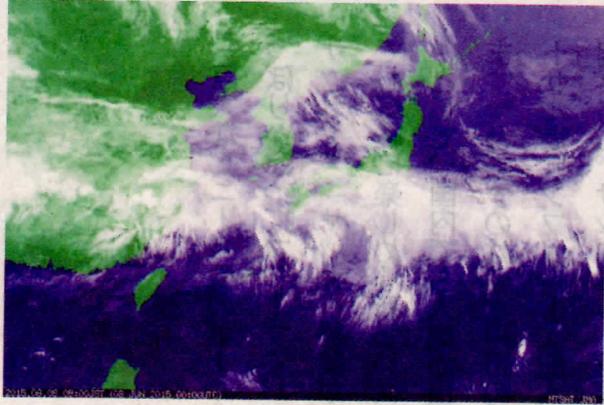
梅雨入り

隣の中国や台湾でも同様な「梅雨（メイユと呼ばれる）」がある。

春が過ぎると太陽は北半球に強い日射を注ぎ、海洋を暖めて、日本付近では「小笠原高気圧」を発達させる。この高気圧は暖かく湿った空気の「海洋性気団」だ。他方、中国大陸方面では、まだ冬の名残の「大陸性気団」で気温も低い。「梅雨前線」は両気団の境目で、前線が日本列島に北上すると「梅雨入り」、さらに北上して「小笠原高気圧」に覆われ始めると「梅雨明け」だ。

梅雨前線の北と南で天気は大きく異なり、また予報も変わりやすい。最新の天気予報とにらめっこしながら、外出や洗濯のタイミングを図ることになる。掲載の「ひまわり衛星」を見ると、日本の南西に梅雨前線が横たわっている。

（元気象庁予報課長、理学博士、鹿嶋市在住）



関東地方が「梅雨入り」したとみられる。梅雨の入り・明けは、社会生活はもちろん、アパレルやビール業界などのビジネスにとっても関心事である。ちなみに梅雨は「晩春から夏にかけて雨や曇りの日が多く現れる現象、またはその期間」と定義されている。

そもそも梅雨は春から夏への季節の遷移の一コマであり、始まりや終わりを日単位で決めることはできない。梅雨は日本付近だけの現象と受け取られがちだが、そうではなく遠く東南アジアから日本にかけての大規模な循環であり、



入道雲

水蒸気が凝結し、雲粒が生まれる。その際に放出される「凝結熱」が発達のエネルギー源である。梅雨の時期はガソリンには事欠かない。

積乱雲の発達には上空に寒気が侵入する場合が好都合。下層の暖かい空気は上空に昇ろうとし、上空の冷たい空気は下がろうとする。このような環境は「大気が不安定」と呼ばれるが、積乱雲は成層圏に深くは侵入できない。なぜなら成層圏では上空ほど気温が高いため、上昇する浮力が得られない。成層圏は「大気が安定」な領域。上昇してくる空気は水平に吹き出すしか手がなく「カナトコ雲」となって周囲に広がる。そこが圏界面であることを物語っている。

積乱雲は、しばしば雷を伴い、雹（ひょう）も降る。竜巻も発生させる。見るからにきれいな積乱雲だが、裏には牙も秘めている。要注意だ。

（元気象庁予報課長、理学博士、鹿嶋市在住）



明日は「夏至」。1年で太陽が最も高く昇り、最も北に来る。梅雨の晴れ間、強い日射で地表が熱せられ、あるいは山の周辺で上昇気流が生まれると、あっという間に入道雲が盛り上がる。頭はまるでカリフラワーのようだ。正式には「積乱雲」と呼ばれ、しばしば1万mを超え、成層圏に達することもある。

この積乱雲、水蒸気というガソリンを食って発達する天然のエンジンといえる。気温が高いほど空気は多くの水蒸気を含むことができる。湿った空気が上昇し始めると、膨張して冷え、